2023年11月18日
自然を語る会

『沈黙の春』第11章　ボルジア家の夢を越えて

飯田橋ボランティアセンター＋zoom
参加者　16名

ボルジア家というと日本人には馴染みが少ないが、ルネサンス期に毒薬を駆使して政敵を倒し、繁栄した一族。

この章では、殺虫剤などの薬物（毒薬）の当時の様子が書かれている。人間にとっても毒性があるのに、スーパーなどで簡単に入手できる、そして商品には小さな字で説明が書いてあるが、誰も読みはしない。少しの量では被害はないかもしれないが、体内に蓄積した場合の被害はわからない、ということだ。

この話は60年前のレイチェル・カーソンが書いているのだが、あまりに今の状況も同じなのでびっくりする。アレルギーは、アレルゲンが人体に蓄積されて限度を越えると発症するということは、今ではよく知られている。

電磁波過敏症のMさんは、この章が自分のことではないかと思えると話してくれた。電磁波も、発症する前はなにも感じなかったそうだ。でも、感じないだけで、その当時も電磁波を受けると心電図などは特殊な波動を見せていたらしい。ある程度を越えた段階で過敏症が発症し、スマホの電磁波などでも体がビリビリしてくる。教科書のデジタル化、5G社会などが進むにつれて、発症する人が増えてくるのは目に見えている。けれども政府は電磁波に関して何も手を打ってくれないという訴えがあった。

電磁波、香り製品、柔軟剤、殺虫剤・・・まわりに危険物質が蔓延しており、普通に使われている。そのようなことに関心が無い人たちにどのようにしたら関心を持ってもらえるか、それが一番の問題だろう。

（報告:小川）